

6

献血推進の為の効果的な広報戦略等の閲覧に関する研究

研究分担者：林 清孝（エフエム大阪音楽出版株式会社 代表取締役社長）

研究協力者：田辺 善仁（株式会社VIP 顧問）

研究要旨

今後の若者献血行動の促進を行うために、献血に対する意識調査を実施。

研究目的

若者に対して献血への動向及びその重要性と理解度を測るため、大阪府赤十字血液センターとの打合せを実施し、安定的に献血者数を増やす為に、以下の2点を目標に活動した。

- ① 献血初体験者を恒常的に増やすことを目的
- ② 初体験者を二回目に誘導することを目的

研究方法

今後、特に10代、20代の献血者を増やす努力が恒常的に必要である。

行う。また番組を通じてガクスイ参加の呼びかけを行っている。

- ② なん MEGA! Z（毎週金曜日 15:00～19:00 生放送）

コーナー：愛ですサークル（15:15～15:20 生放送）

内容：毎週1回の「献血予報」を ONAIR

各血液型の備蓄状況を、天気予報のように毎週伝えていく。

その情報で、できる限りのリスナーの関心と初動を促す。（情報提供：大阪府赤十字血液センター）

FM 大阪献血推進の2015年～2016年の研究活動内容

- ① FMOSAKA と よしもとクリエイティブエージェンシーが強力タッグ

～よしもとラジオ高校～ラジコ～

放送時間：毎週月～木曜日 21:00 - 21:55

生放送

ターゲット：10代男女

コンセプト：「笑い」を制した者のみがクラスを制する・・・それが大阪！

出演者：新進気鋭のよしもと芸人の皆さんと FMOSAKA DJ みいが番組進行をつとめる。

月曜：天竺鼠 火曜：学天即 水曜：藤崎マーケット 木曜：かまいたち

献血推進コーナー：毎週火曜日：学天即 21:37～5分コーナー（事前収録）

内容：大阪府献血センターの情報で近畿大学、大阪産業大学、大阪福祉大学のガクスイメンバー4人による番組コーナーの展開を実施。

ガクスイメンバーが大阪12の献血センターに出向いて献血者へのインタビューを実施し、番組で放送を

- ③ 御堂筋献血ルーム CROSS CAFE」における展開 Brand-new Blood @ CROSS CAFE 2015年度の展開について

大阪御堂筋にある御堂筋献血ルーム「CROSS Cafe」において毎週土曜日にライブイベントを実施。特に高校生によるライブを実施し意識調査を聞きとる。献血の意識アンケート調査を実施することになっている。

（倫理面への配慮）聞き取り調査については、個人情報取り扱いについては(株)エフエム大阪のプライバシーポリシーに則り適宜対応した。

研究結果

毎週土曜日に関西在住のインディーズアーティストの出演によるライブを御堂筋献血ルーム「CROSS Cafe」で実施し、特に月に一回程度で「高校生の日」を設け、咲くやこの花高校を中心に14校の高校の、軽音楽クラブのライブを実施し、10代のリアルな意識を発信できるようにした。当日に献血する高校生や学校内で献血についての話題が広がっている。

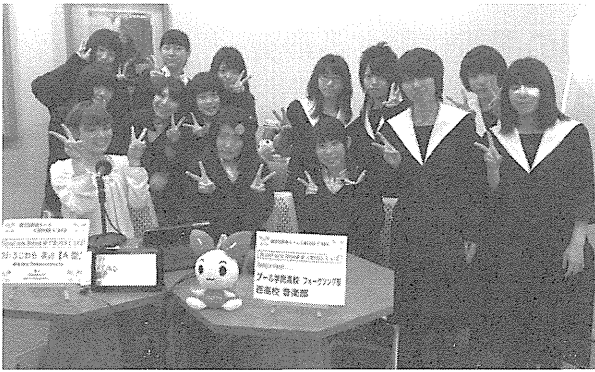


図1 月に1回開催の高校生の日



図2 咲くやこの花高校軽音楽クラブの様様

●ニコ生の追加配信によるビューワーの増加！

2011年12月のスタート当初から、U-stream のみでの配信だったが、今年度からスタートさせた「ニコ生」による平行配信のおかげで、ビューワー数の増加が成果として表れている。

まず、2015年12月で3周年を迎えました U-stream の番組視聴者について、一昨年2014年は1万人だったが、昨年2015年は約2万人と倍になった。

大阪府赤十字血液センターの方の話では、一番訴求したい10代に直接的に訴求できることが評価として高いと言われている。高校生の約3割が献血をして帰っている。

実施日	
2015年度	
4月4日	若林美樹
4月11日	白木絢子
4月18日	休み
4月25日	プール学院高校
	泉陽高校
5月2日	浦部陽介
5月9日	Megu
5月16日	タムロリエ
5月23日	休み
5月30日	大阪国際滝井高校
	扇町総合高校
6月6日	Charmant coco
6月13日	佐合井マリ子
6月20日	休み
6月27日	大谷高校
	滋賀短大付属高校
7月4日	休み
7月11日	しなだゆかり
7月18日	淀商業高校
	金岡高校
7月25日	Le Siana
8月1日	榊原粧子 (CHiChi)
8月8日	休み
8月15日	HART (虹色音楽館)
8月22日	空想パズル
8月29日	星林高校
	北淀高校
9月5日	平成浪漫ポルノ
9月12日	阪南大学高校
	西高校
9月19日	休み
9月26日	大阪教育大学 軽音楽部
10月3日	TOUMA
10月10日	休み
10月17日	山本アラタ
10月24日	大津高校
	大津清陵高校
10月31日	山本紗江
11月7日	休み
11月14日	樟蔭高校
	奈良育英高校
11月21日	MK(咲くやこの花高校 OG バンド)
	周年記念スペシャル
11月28日	ちなげ
12月5日	marvel in vain
12月12日	休み
12月19日	桜宮高校
	咲くやこの花高校
12月26日	近藤慎之介
2016年	
1月2日	休み
1月9日	大山藍
1月16日	yokko
1月23日	Nacomい
1月30日	草津東高校
	滋賀短大付属高校

考察

若者の献血離れが大きく、2014年度の大阪府内の献血者数は10代が1,600人、20代が65,000人。献血できる全年代に占める割合は21%で、1999年度の41%から大幅に減った。

要因の一つに、高校生の中で盛んだった「200ミリリットル献血」が減ったことが挙げられる。献血には、16才からの200ミリリットルのほか、男性17才、女性18才からの「400ミリリットル」、18才からの「成分献血」がある。しかし、同じ血液型でも人により微妙に異なり、同じ量でも少人数でまかなうほうが、発熱やじんましんなど副作用の危険性が低くなる。だから今は「400ミリリットル」が中心になったということが、献血離れの要因のひとつとして考えられる。

そこで、エフエム大阪の放送では、毎週火曜日の夜9時30分に近畿大学、大阪産業大学、大阪福祉大学のガクスイメンバーによる大阪12の献血ルームにインタビューを行い、番組で放送している。また、毎週金曜日の夕方6時30分には番組「愛ですサークル」として、各血液型の備蓄状況を、天気予報のように伝えている。これによりリスナーの関心と初動を促すことができる。そして、具体的な行動として、御堂筋献血ルームでライブイベントを実施することで、その場で献血の体験を実施することができている。

このような毎週の地元における血液型別在庫情報の広報などが更に広がれば、献血の重要性が更に広がると考えられる。また、各献血ルームで展開する各種サービスやイベント情報を知らない人が多く、献血推進する側の努力を伝える必要がある。

結論

日本は本格的な少子高齢社会を迎えた。輸血用血液製剤や血漿分画製剤の大半は、高齢者の医療に使われている。輸血用血液製剤の84.8%は50歳以上の患者さんに使用されている。

一方、献血にご協力いただいた方々の年齢層を見ると、約76%が50歳未満（その内の約25%が16～29歳）であり、健康的な若い世代の献血が高齢者医療の多くを支えている現状がある。今後、

少子高齢化が進むにつれて、現在の献血者比率がこのまま推移していくと、救命医療に重大な支障をきたす恐れがある。

手術を受ける心臓病患者や、抗がん剤治療の影響で血をつくる機能が低下したがん患者には、大量の輸血が必要である。2013年に大阪府内の病院へ供給された血液製剤は、200ミリリットル換算で156万本分、近畿2府4県への供給本数のほぼ半数を占めている。その一方で、大阪府は国立循環器病研究センターや大阪大学医学部附属病院などの専門医療機関が集まり、全国から多くの患者が集まる特殊事情があるため、1回の手術で100人分の輸血が必要になることもある。しかし、近畿の血液製剤は「使う府県でまかなうのが基本」となっており、大阪府は慢性的に血液製剤が足りない状況であり、少なくなる若者への献血対策はさらに必要になっている。

安定的に献血者数を増やすためには、献血初体験者を恒常的に増やすことが重要であり、次に初体験者を二回目に誘導することが必要となり、そして、複数回献血クラブに参加させるようにすることが重要である。目標として男子は年3回、女子は年2回として、その間を成分献血でつなぐ工夫が必要と考えられる。そのためには不断の広報展開と実体験の場が必要かと考える。

健康危険情報

該当なし

研究発表

該当なし

知的財産権の出願・取得状況

該当なし

7

若者の献血行動を促進する効果的な教育プログラムに関する研究

研究分担者：大川 聡子（大阪府立大学地域保健学域看護学類）

研究協力者：安本 理抄（大阪府立大学地域保健学域看護学類）

根来佐由美（大阪府立大学地域保健学域看護学類）

上野 昌江（大阪府立大学地域保健学域看護学類）

川口 広志（大阪府赤十字血液センター南大阪事業所事業課）

藤原 弘明（大阪府赤十字血液センター南大阪事業所事業課）

林 雅人（大阪府赤十字血液センター南大阪事業所事業課）

森 とも子（大阪府藤井寺保健所薬事課）

松田 岳彦（大阪府藤井寺保健所薬事課）

酒井 典子（大阪府藤井寺保健所企画調整課）

研究要旨

本研究の目的は、若者の献血及び輸血に対する意識について調査を行い、若者の献血行動や献血への意識を踏まえた効果的な献血啓発方法を明らかにすることである。27年度は若者の献血行動や献血への意識を把握するために、献血・輸血に関するアンケートをA大学B学部学生に対して実施し、242名の回答を得た。また、若者の献血行動を促進するためには若者同士での啓発が重要であると考え、大阪府赤十字血液センター南大阪事業所及び大阪府藤井寺保健所薬事課・企画調整課と連携し、献血ボランティア講座を開催、B学部学生10名が参加した。また、アンケート翌週に献血バスをA大学Zキャンパスに配車し33名の受付、13名が採血を行った。

来年度はアンケートを他大学、他学部にも依頼・配布し献血啓発を行ない、献血啓発ボランティアへの参加を働きかける。また今年度育成したボランティアの活動の場を広げられるよう、関係各所と調整を行っていく。

研究目的

献血の安定供給の維持と推進のために、献血の意義や献血機会の拡大を啓発することは喫緊の課題である。しかし少子化や高校献血の減少、若年層の献血に対する認識の低下などから、近年は若年層の献血者が減少している。そのため、若者の献血及び輸血に対する意識について調査を行い、若者の献血行動や献血への意識を踏まえた効果的な献血啓発方法を検討することを目的に本研究を実施した。

研究方法・結果

1. 「献血・輸血に関するアンケート調査」

A大学B学部学生266名に対し、献血回数、初めて献血した年齢、献血した際の痛み、献血への意識、献血に関する知識等について無記名自記式質問紙調査を実施した。調査期間は2015年11～

12月。

調査依頼方法は、A大学に文書と口頭にて研究趣旨および内容を説明して研究協力を依頼し、研究協力の承諾を得た。講義終了後学生に対し、研究の趣旨・内容などを口頭と文書で説明し、調査票を配布し調査協力を依頼した。調査票の記入と、回収箱への投函をもって研究協力の同意を得たものとした。

（倫理面への配慮）本研究結果は、献血に関する普及・啓発活動以外の目的では使用しないこと、回答は統計的に処理され個人が特定されないこと、回答しないことによる不利益がないこと、回答中止が可能であること等を文書および口頭にて説明した。本研究に関しては、大阪府立大学大学院看護学研究科研究倫理委員会において承認を得た。

アンケート回収数は243名（回収率91.4%）、有効回答数242名（有効回答率91.0%）であった。

分析対象者の基本属性を表 1 に示す。

		N=242	
項目		人数	%
年齢	年齢階層区分		
	10歳代	121	(50.0)
	20歳代	113	(46.7)
	30歳代	3	(1.2)
	無回答	5	(2.1)
性別	男性	13	(5.4)
	女性	227	(93.8)
	無回答	2	(0.8)
家族形態	1人暮らし	49	(20.2)
	家族と同居	190	(78.5)
	無回答	3	(1.2)

表 1 分析対象者の基本属性

10 代、20 代の回答者がそれぞれ 121 名 (50.0%)、113 名 (46.7%) と多くを占めていた。男女別では、女性が 227 名 (93.8%) と多かった。家族形態は、家族と同居している人が 190 名 (78.5%) と多かった。

1) これまでの献血回数

これまでの献血回数 (N=239) は、「あり」と答えた人が 59 名 (24.7%)、「なし」が 180 名 (75.3%) と多かった。「あり」と回答した人の内訳は「1 回」32 名 (13.4%)、「2 回」10 名 (4.2%)、「3～5 回」11 名 (4.6%) であった。

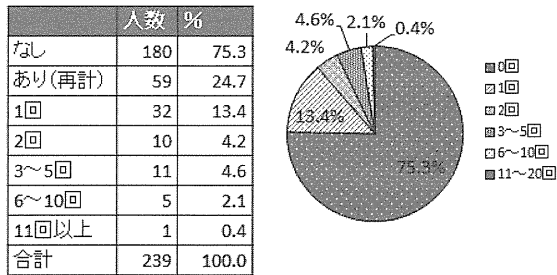


図 1 これまでの献血回数

2) 初めて献血した年齢

初めて献血した年齢 (N=57) について、平均年齢は 18.7 ± 2.1 歳であった。内訳は、15～17 歳が 13 名 (22.8%)、18～19 歳が 31 名 (54.4%)、20～24 歳が 11 名 (19.3%)、25～29 歳が 2 名 (3.5%) であった。

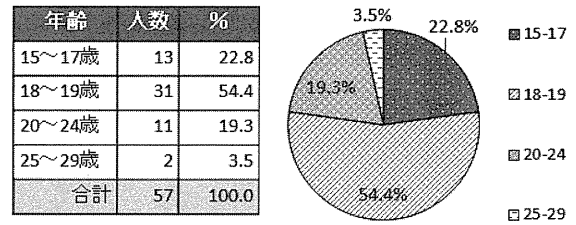


図 2 初めて献血した年齢

3) 献血した際の痛みの程度

献血した際の痛みの程度 (N=57) について、「全く痛みがない」と回答した人は 7 名 (12.3%)、「ちょっとだけ痛い」と回答した人は 34 名 (59.6%)、「軽度の痛みがあり少し辛い」と回答した人は 11 名 (19.3%)、「中等度の痛みがあり辛い」と回答した人は 5 名 (8.8%) であった。

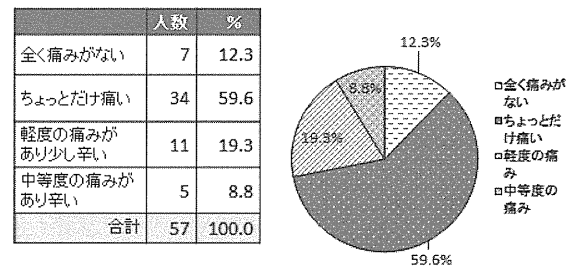


図 3 献血した際の痛みの程度

4) 献血をしようと思った理由

献血をしようと思った理由で最も多かったのは「自分の血液が誰かの役に立てほしい」40 名、「粗品などがもらえるから」25 名、「近くに献血車が来たから」19 名、「友人に誘われたから」18 名、「血液結果が自分の健康管理になるから」17 名、「なんとなく」10 名、「輸血用の血液が不足しているから」10 名、「将来自分や家族が輸血を受けるかもしれないから」9 名、「過去に家族などが輸血を受けたことがあるから」6 名、「習慣になっているから」2 名であった。

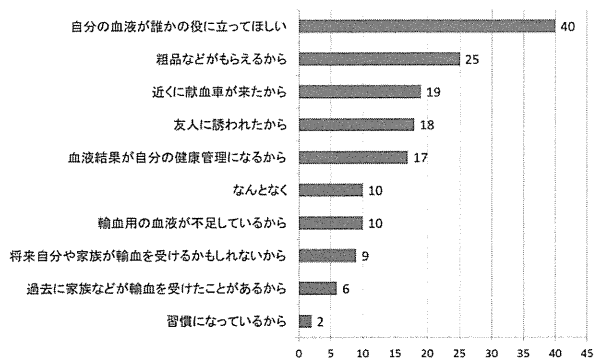


図4 献血をしようと思った理由(複数回答)

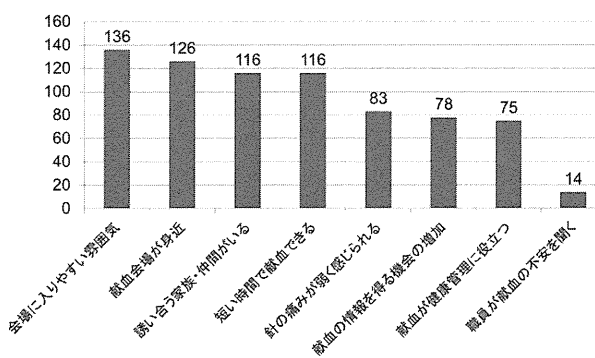


図6 献血をする人が増えると思う取り組み(複数回答)

5) 献血車の情報入手経路

献血車の情報入手経路で最も多かったのは、「ポスター」115名であった。その他、「口コミ」43名、「ネット・スマホ・携帯」17名、「テレビ」8名、「校内放送」3名、「新聞」2名、「雑誌」2名、「その他」35名であった。

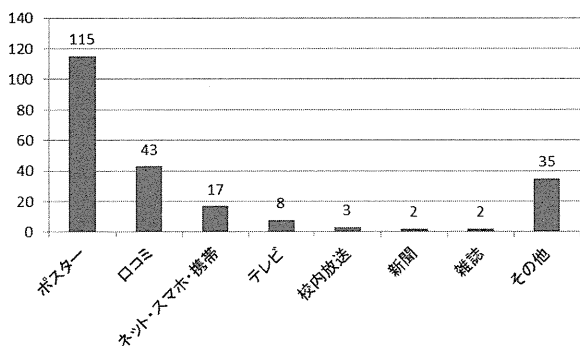


図5 献血車の情報入手経路(複数回答)

6) 献血をする人が増えると思う取り組み

献血をする人が増えると思う取り組みについて、「会場に入りやすい雰囲気」が136名と最も多く、その他「献血会場が身近」126名、「誘い合う家族・仲間がいる」116名、「短い時間で献血できる」116名、「針の痛みが弱く感じられる」83名、「献血の情報を得る機会の増加」78名、「献血が健康管理に役立つ」75名、「職員が献血の不安を聞く」14名であった。

7) 献血を他の人にも勧めているか

献血を他の人にも勧めていますか(N=236)について、「はい」と答えた人は53名(22.5%)、「勧めたいと思うが実際に勧めたことはない」72名(30.5%)、「いいえ」111名(47.0%)であった。

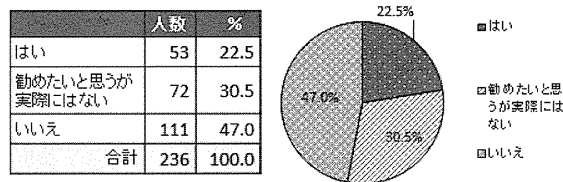


図7 献血を他の人にも勧めているか

8) 献血を誰に勧めているか

献血を誰に勧めているか(N=236)について、「友人」と答えた人が45名と最も多く、次いで「家族」21名、「恋人」7名、「知人」3名、「親戚」2名、「同僚・職場の人」1名、「その他」2名であった。

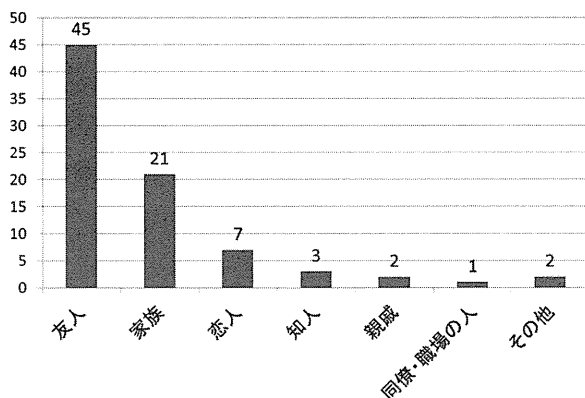


図8 献血を誰に勧めているか(複数回答)

9) 他の人に献血を勧めない理由

他の人に献血を勧めない理由は、「なんとなく」70名、「忘れてしまう」24名、「自分も献血をしたく

ない」23名、「面倒くさい」16名、「時間がかかる」15名、「勧める相手がいない」12名、「気恥ずかしい」3名、「その他」37名であった。

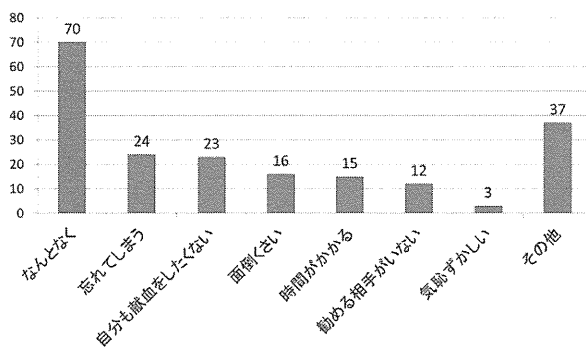


図9 他の人に献血を勧めない理由（複数回答）

10) 献血を敬遠しがちになる理由

献血を敬遠しがちになる理由は、「あり」と答えた人は106名(44.7%)、「なし」と答えた人は131名(55.3%)であった。

「あり」と答えた人の理由は「なんとなく不安」が37名と最も多く、次いで「時間がかかる」36名、「針を刺すのが痛くて嫌だから」31名、「献血する時間がない」30名、「恐怖心」24名、「献血会場に入りづらかった」20名、「健康上できないと思った」12名、「血をとられるのが嫌だ」12名、「どこでできるかわからない」8名、「その他」26名であった。

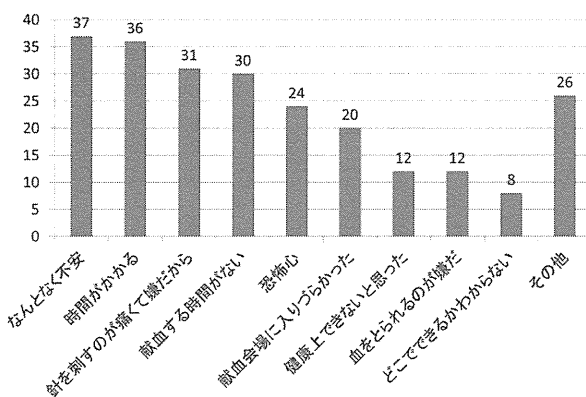


図10 献血を敬遠しがちになる理由（複数回答）

11) 献血したいができなかった経験の有無

これまで献血しようと思ってできなかった経験(N=227)について、「ある」と答えた人は89名(39.2%)、「ない」と答えた人は138名(60.8%)であった。

「ある」と答えた人の理由については「血色素量(ヘモグロビン濃度)が低い」が33名と最も多く、「服薬している」11名、「献血制限がある国への渡航歴

がある」6名、「献血間隔が短い」4名、「血圧が高い」2名、「その他」41名であった。その他の内訳で多かったのは、体重が基準に満たなかった、予防接種を受けていた等の理由であった。

12) 若年層の献血件数に関する認知

最近若年層の献血件数が減少していることを知っていますか、という設問では、「はい」と答えた人が110名(45.8%)、「いいえ」と答えた人が130名(54.2%)であった。

13) 大阪府内献血ルームで行っているイベントの認知

大阪府内献血ルームで行っているイベントの認知については、「献血後にアイスクリームサービス」が55名と最も多く、次いで「抹茶でくつろぎタイム」18名、「ヘッドマッサージ」13名、「アロマセラピー」9名、「ネイルケア」8名、「タロット占い」6名、「手相占い」5名、「パーソナルカラー診断」5名、「カイロプラクティック」4名、「インディーズアーティストのライブ」4名、「耳つぼマッサージ」4名等であった。

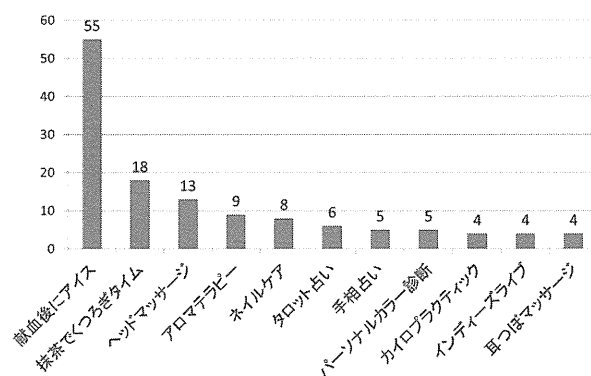


図11 大阪府内献血ルームのイベント認知

14) 献血を広める活動への参加希望

献血を広める活動に参加したいと思いますか、という設問では、「はい」と答えた人が129名(58.9%)、「いいえ」と答えた人が90名(41.1%)であった。

2. 「献血ボランティア講座」

アンケート配布1週間後に大阪府赤十字血液センター、大阪府藤井寺保健所薬事課・企画調整課と共催し、A大学学生向けに献血ボランティア養成講座を実施した。

内容は、以下の3つの講義で構成した。

★「わが国の献血状況」大阪府赤十字血液センター
南大阪事業所事業課 川口広志 主事

DVD「アンパンマンのエクス」を上映し、パンフレットを基に献血の歴史や現在の献血の需給状況についてご報告いただいた。

★「献血における保健所の役割」大阪府藤井寺保健所生活衛生室薬事課 松田岳彦 課長

献血啓発活動の法的根拠および保健所の役割、それを踏まえたこれまでの取り組みの経緯についてご報告いただいた。

★保健師と学生ボランティアの協働 大阪府藤井寺保健所企画調整課 酒井典子 企画総括

学生ボランティアを支援されてきた経緯を踏まえ、保健師として地域づくり、人づくりに関わる意義や学生ボランティアの魅力について報告していただいた。

に超過した後も学生から熱心な質問が相次ぎ、血液センターや保健所及び保健師の役割を学ぶ機会ともなっていた。

参加後の学生の感想文を抜粋して以下に示す。

「足りません!」と声かけをしている方を見ても、誰かが何とかしてくれると思ってしまっていたのですが、皆がそう思うと命の危機に陥る人がいるということを今回強く感じ、できる限り献血に行こうと思いました。

予想していたより献血不足が深刻で驚きました。献血が足りないということを知っている人、実感している人は少ないと思うので、今日流していたVTR(アンパンマンのエクス)のようなものをもっと広めていけたら、献血者が増えるのではないかなと思いました。


献血は私たちが1人で気軽にできるボランティアであり、また入院している患者さんへの「応援の心」であるということを今度は私から、周囲の家族や友人に伝えていきたいと思いました。

今後手術に関連する病棟で看護師として働く予定なので、少しでも今回の講義の知識を活かして、また献血してくれる方々に感謝を忘れずに使うことができる看護師でいたいと思いました。

献血の現状や必要性を啓発することが必要であると強く思いました。知人からの声、親子間での教育、祖父母から子、孫への啓発を促すという視点は今後の自己の保健師活動をする上でも使えると思いました。

3. 「献血バス配車」

アンケート翌週に、献血バスをA大学Zキャンパスに配車した。配車時間は11:00～14:00で半日単位とした。当日は33名が受付、13名が採血を行った。女性が多いキャンパスであることから、200ml献血の容器を多く準備していただいた。採血13名中400ml献血が5名、200ml献血が8名であった。不採血の理由は、貧血(13名)が最も多く、他の理



献血についてもっと詳しく知ろう!

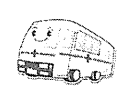
～献血推進ボランティア養成講座～

日時 2015年12月8日(火) 16:15～17:20
場所 J402教室
対象 A大学学生

プログラム

- ☆ わが国の献血状況
大阪府赤十字血液センター 南大阪事業所事業課 川口広志 主事
- ☆ 献血における保健所の役割
大阪府藤井寺保健所 生活衛生室薬事課 松田岳彦 課長
- ☆ 保健師と学生ボランティアの協働
大阪府藤井寺保健所 企画調整課 酒井典子 企画総括

献血バスがやって来る!



日時 2015年12月15日(火) 10:45～13:00(受付終了)
場所 Zキャンパス L棟北側オープンスペース

参加申し込み・連絡先

B学類 C分野 大川聡子(J509研究室)

e-mail: satoko@~




図12 学内掲示チラシ

当日の参加者は10名であった。予定時間を大幅

由としては時間がない、服薬等が挙げられた。

学生が「けんけつちゃん」の着ぐるみを着用し、昼休みに大学構内で献血啓発を行なった。

考察

1. 献血・輸血に関するアンケート

現在、成人式を迎える若者を対象に「はたちの献血キャンペーン」が行われているが、本調査において、初めて献血した平均年齢が 18.7 歳であったことから、献血をする若者は、20 歳より早い時期から献血を開始していると考えられる。このため、高校から大学へと大きく生活形態が変わる高校 3 年時にも献血を啓発することが必要であると考ええる。

現状では、若年層の献血者数が減少していることを知らない若者が 54.2% と過半数を超えている。知識の不足が献血行動につながらない一因にもなりうるだろう。こうした現状を踏まえ、まず献血に関する知識の提供を行なうことから、献血行動への動機づけをすすめていきたい。

「献血を他の人にも勧めていますか」という設問では、「勧めたいと思うが実際に勧めたことはない」が 72 名 (30.5%) と多かった。このように、献血に関心はあるが、人に勧めるには抵抗感を持っている学生へのアプローチが必要であると考ええる。同様に、他の人に献血を勧めない理由として「なんとなく」が最も多く、献血を敬遠しがちになる理由も「なんとなく不安」が最も多かった。こうした「なんとなく」という漠然とした不安を払しょくするためのアプローチが必要である。

漠然とした不安を払しょくするための物的（ハード面）整備として、「献血をする人が増えると思う取り組み」で多く挙げられた「会場に入りやすい雰囲気」や「身近な献血会場」が必要であると考ええる。一方で、人的（ソフト面）支援として、献血を最も多く勧めている「友人」同志のつながりを生かした取り組みが必要であると考ええる。「献血をする人が増えると思う取り組み」において、「誘い合う家族・仲間がいる」という意見はハード面の整備に次いで多かった。友人・仲間同士で誘い合って、献血に行くことのできるような環境づくりを進めていく事が重要である。現在育成している学生ボランティアがその一助となることができるよう、今後も活動を支援

していきたい。

2. 献血ボランティア講座

講義終了後の感想文から、若者は献血が不足していることは知っていても、（将来的に）どのくらい足りない/足りなくなるのかについての知識は乏しいことが示された。このことから、この状況が続くと将来どうなるのかといった将来予測を踏まえて、若者たちに届く方法で献血を啓発していく必要があると考える。

放映した DVD「アンパンマンのエキス」では、輸血を受けた対象者・家族の声が語られていた。この内容に感動し、献血を啓発していきたいという学生も多くみられた。この DVD では、献血が「誰に」届くのが明示されており、そのことが学生の行動変容につながったと考えられる。このことから、献血・輸血が届くのはどのような対象者なのか、献血を受けることによりどのような利益があるのかを伝えることが、より若者の献血行動を促進すると考える。

また、感想文において「今後手術に関連する病棟で看護師として働く予定」の学生が「献血をしてくれる方々に感謝を忘れず使うことが出来る看護師になりたい」という抱負を記載していた。また「周囲の人々に啓発」することの重要性について学んでいる学生もいた。

このことから、本講座は若者の献血行動を促進させるだけでなく、後に医療従事者となる学生たちが、医療者としての自身のあり方を再考するきっかけにもつながったと考えられる。こうした講座を今後も継続し、献血の普及はもちろんのこと、学生が医療者としてのあり方を学ぶ場としても活用していきたい。

3. 献血バス配車

平日であったため、昼休み以外は学生の通行が少なく、参加者が少なかった。また受付後に不採血となる学生も多かった。今後は、学園祭などイベント時の配車や、他学部の学生と協働するなど、参加者が増加するための取り組みについて再度検討したいと考えている。

結論

今年度開始した事業であったが、学生の意識調査や大阪府赤十字血液センター南大阪事業所、大阪府藤井寺保健所と連携した活動ができ、学生ボランティアも誕生し、一定の成果を挙げることができたと考えている。次年度以降はアンケートを他学部・他大学に依頼・配布し、献血啓発を行ない、献血啓発ボランティアへの参加を働きかけたい。

また今年度育成したボランティアの活動の場を広げられるよう、関係各所と調整を行っていく。

健康危険情報

該当なし

研究発表

該当なし

知的財産権の出願・取得状況（予定を含む）

該当なし

献血・輸血に関するアンケート

下記のアンケートへのご協力をお願いいたします

- ・アンケートは全部で4ページです。回答に係る時間は約10分程度です。
- ・Q1～Q21の質問に、最も当てはまる番号・項目を1つ選んで○をつけてください。
- ・複数回答可となっている項目では、あてはまるものすべてに○をつけてください。
- ・()には数字もしくは言葉をご記入ください。

あなたのことについてお聞きします。

年齢： () 歳

学年： () 年生

性別： 1. 男性 2. 女性

同居家族： 1. 一人暮らし 2. 家族と同居

現在所属する学部を、以下の系から1つ選んでください。

1. 人文学系 2. 社会科学系 3. 理学系 4. 工学系
 5. 農学系 6. 歯歯薬看護系 7. 教育学系 8. 芸術系
 9. 総合系 10. その他 ()

献血についてお聞きします。

Q1 あなたのこれまでの献血経験回数を教えてください。

1. 0回 2. 1回 3. 2回 4. 3～5回
 5. 6～10回 6. 11～20回 7. 21回～30回 8. 31回以上

Q1で0回と答えた方は、Q7へ、それ以外の方はQ2へお進みください。

Q2 何歳で初めて献血しましたか？

() 歳

Q3 献血した際の痛みの程度を以下の6段階のなかからフェイススケール値に○をしてください。

・フェイススケール



<フェイススケールの解説>

- 0: 全く痛みがない
- 1: ちょっとだけ痛い
- 2: 軽度の痛みがあり、少し辛い
- 3: 中等度の痛みがあり、辛い
- 4: かなりの痛みがあり、とても辛い
- 5: 耐えられないほどの強い痛みがある

Q4 主に献血している場所はどこですか？ (複数回答可)

1. 献血ルーム 2. 献血車 3. その他 ()

Q5 これまで受けた献血の種類をお答えください。(複数回答可)

1. 400ml 献血 2. 200ml 献血 3. 成分献血

Q6 献血をしようと思った理由は何ですか？ (複数回答可)

1. 自分の血液が誰かの役に立ってほしいから
 2. 輸血用の血液が不足しているから 3. 血液検査の結果を知りたいから
 4. 粗品などがもらえるから 5. 習慣になっているから
 6. 過去に家族などが輸血を受けたことがあるから
 7. 将来自分や家族が輸血を受けることがあるかもしれないから
 8. なんとなく 9. 近くに献血車が来たから 10. 友人に誘われたから
 11. その他 ()

Q7 献血ルーム・献血車がどこにあるのか、知っていますか？

1. はい 2. いいえ 3. その他 ()

Q8 献血車が来るなどの情報は、何を見て知る事が多いですか？ (複数回答可)

1. ポスター 場所 ()
 2. インターネット、スマホ、携帯など 3. テレビ 4. ラジオ 5. 新聞
 6. 雑誌 7. 口コミ 8. 校内放送 9. その他 ()

Q9 最近、若年層の献血件数が減少していることを知っていますか？

1. はい 2. いいえ

Q10 20代の献血率は何%だと思いますか？

1. 10%未満 2. 10～19% 3. 20～29%
 4. 30～39% 5. 40%以上

Q11 大阪府内では、1日に何人分の献血が必要だと思いますか。

1. 1～50人 2. 50～100人 3. 100～500人
 4. 500～1,000人 5. 1,000～2,000人 6. 2,000～3,000人
 7. 3,000～5,000人 8. 5,000～10,000人 9. 10,000人以上

Q12 どのような取り組みがあれば、献血する人が増えると思いますか？ (複数回答可)

1. 献血会場が身近にある 2. 誘い合う家族・仲間がいる
 3. 献血会場に入りやすい雰囲気がある 4. 献血の情報を得る機会が増える
 5. 短い時間で献血できる 6. 針の痛みが弱く感じられる(麻酔など)
 7. 職員が献血の不安を聞いてくれる 8. 献血が自分の健康管理に役立つ
 9. その他 ()

Q13 献血を他の人にも勧めていますか？

1. はい 2. 勧めたいと思うが実際に勧めたことはない 3. いいえ

Q13-1 「はい」と答えた方にお尋ねします。誰に勧めていますか？（複数回答可）

1. 家族 2. 親戚 3. 友人 4. 恋人 5. 同僚・職場の人
6. 知人 7. その他（ ）

Q13-2 どのように声をかけて他の人に勧めましたか、具体的に記入して下さい。

Q13-3 「実際に勧めたことはない」、「いいえ」と答えた方にお尋ねします。
献血を勧めない理由について、あてはまるものに○をつけてください。（複数回答可）

1. 自分も献血をしたくないから 2. 面倒くさい 3. なんとなく 4. 気恥ずかしい
5. 忘れてしまう 6. 勧める相手がいない 7. 場所が遠い 8. 時間がかかる
9. その他（ ）

Q14 あなたが輸血を受けたと想定して、あなたの考えにあてはまる番号に○をして下さい。

基準：4＝大変そう思う 3＝そう思う 2＝少しそう思う 1＝思わない

- ① 輸血したことで体調が良くなる [4 3 2 1]
- ② 輸血したことで体が力が満ちてくる [4 3 2 1]
- ③ 輸血したことで心に力が満ちてくる [4 3 2 1]
- ④ 輸血したことで命が助かる [4 3 2 1]
- ⑤ 輸血したことで治療（手術など）がうまくいく [4 3 2 1]
- ⑥ 治療に必要であっても輸血はしたくない [4 3 2 1]
- ⑦ 輸血はもったいないから1滴も無駄にできない [4 3 2 1]
- ⑧ 輸血は時間がかかって苦痛だ [4 3 2 1]
- ⑨ じんま疹などの輸血の副作用が心配だ [4 3 2 1]
- ⑩ 輸血したことで病気に感染することが心配だ [4 3 2 1]
- ⑪ 献血してくれる人は善意がある [4 3 2 1]
- ⑫ 輸血を受けた人は、献血してくれた人に感謝している [4 3 2 1]
- ⑬ 輸血を受けた人は、献血の重要性がわかる [4 3 2 1]
- ⑭ 献血の重要性を知らない人が多い [4 3 2 1]

Q15 輸血は、どのような疾患の方に最も多く使われると思いますか、次のうち1つを選んで、○をつけてください。

1. がんなどの悪性新生物 2. 白血病などの血液及び造血器の疾患
3. 心臓病などの循環器疾患 4. 胃がんなどの消化器疾患
5. 慢性関節リウマチなどの筋骨格系及び結合組織の疾患 6. 尿路結石など泌尿器系疾患
7. 分娩 8. けがや中毒 9. その他（ ）

Q16 献血を敬遠しがちになる理由がありますか？

1. あり 2. なし

Q16-1 「あり」と答えた方にお尋ねします。その理由は何ですか？（複数回答可）

1. 時間がかかる 2. 献血する時間がない 3. 針を刺すのが痛くて嫌だから
4. なんとなく不安 5. 恐怖心 6. 健康上できないと思った
7. 献血している場所に入りづらかった 8. 血をとられるのが嫌だ
9. どこで献血できるかわからない
10. その他（ ）

Q17 これまで献血をしようと思って、できなかったことはありますか

1. ある 2. ない

Q17-1 「ある」と答えた方にお尋ねします。その理由は何ですか？（複数回答可）

1. 血色素量（ヘモグロビン濃度）が低い 2. 服薬している 3. 血圧が高い
4. 献血間隔が短い 5. 献血制限がある国への渡航歴がある
6. その他（ ）

Q18 成分献血は、全血献血より血色素量（ヘモグロビン濃度）の基準が低く設定されていることを知っていますか？

1. はい 2. いいえ

Q19 大阪府内の献血ルームで行っているイベントについて、知っているものに○をつけてください。（複数回答可）

1. パーソナルカラー診断 2. ヘッドマッサージ 3. 抹茶でつづろぎタイム
4. タロット占い 5. ネイルケア 6. 手相占い 7. メイクのアドバイス
8. インディーズアーティストのライブ 9. 献血後にアイスクリームサービス
10. 似顔絵プレゼント 11. アロマセラピー 12. カイロプラクティック
13. 耳つぼマッサージ 14. ボディジュエリー 15. ファイナンシャルプランニング

Q20 献血を広める活動に参加したいと思いますか

1. はい 2. いいえ

Q21 その他、献血に対するご意見・ご感想があればご自由にお書きください。



アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

8

HIV 感染ハイリスク層への情報伝達方法及び意識調査の研究

研究分担者：生島 嗣（特定非営利活動法人ふれいす東京）

研究協力者：岩橋 恒太（特定非営利活動法人 akta）

市川 誠一（人間環境大学看護学部 特任教授）

藤田 彩子（東京大学大学院医学系研究科）

研究要旨

本研究では、安全な献血血液確保のための有効な情報伝達のあり方および普及啓発方法を検討し提示するため、ハイリスク層の一つである MSM (Men who have Sex with Men) における献血についての意識や行動の実態を明らかにすることを課題とした。

今年度は、献血で HIV 陽性が判明した MSM 2名および献血習慣のある MSM 1名を対象に、来年度に実施予定の web アンケートのためのパイロットとしての聞き取り調査を実施した。インタビューシートを作成し、半構造化面接を個別に実施した。生涯の献血教育に触れた機会、献血時の問診を受けた経験について聞き取りを行った。加えて、これまでの MSM としての気づき、性行動、HIV 検査行動に聞き取りを行った。

結果、今回の聞き取り調査から、インタビュー協力者の献血への動機の一部は、社会貢献が目的で検査ではなかった。また、ウィンドウピリオドについての知識の浸透が不十分である点、現行の献血対象の排除項目の説明が MSM には必ずしも説得力のあるものにはなっていない可能性、さらには「差別的」だと受け取られことが、排除項目の説得力を弱めている可能性が示唆された。

研究目的

我が国は、少子高齢化による人口動態、臓器移植の推進などにより献血液の需要が一段と高まると予測される。一方で若者の献血離れなどにより、需要に対する供給は不足すると推計されており、将来の高まる需要に見合った献血の確保は極めて重要である。

他方、昨今献血による HIV 感染事例が問題となった。若林、生島らの HIV 陽性者を対象にした調査によれば、感染判明のきっかけが献血であるものが 3.1% あった。感染の可能性の認識は他の手段に比べると低いものの、そのうち 27.2% は献血時に HIV 感染可能性がある程度以上あったと回答している。市川、塩野らによる一般人口を対象とした調査からは、過去 6 か月間の献血経験をもつ MSM (Men who have Sex with Men) がある一定割合いることが報告されている。しかし、その背景については不明な点が多く、より詳細な調査が求められている。

そこで本研究では、安全な献血血液確保のための有効な情報伝達のあり方および普及啓発方法を検討し提示するため、ハイリスク層 (MSM) における献血についての意識や行動の実態を明らかにするこ

とを目的とする。

研究方法

1. MSM を対象とする献血に関連する経験に関する調査

本研究は、MSM を対象とし無記名自記式ウェブ調査を行う。本調査に先だって、適切な質問紙作成のためパイロット調査を行った。今後、今回のパイロット調査をもとに作成する質問紙を用いて、本調査を行う。

①パイロット調査：質問紙作成のため、献血で HIV 陽性が判明した MSM および献血習慣がある MSM、3 名程度を対象に、個別の半構造化された質問紙を元に聞き取り調査を行った。献血や検査に至る経過について面接し、事例を収集した。その内容に基づいて調査項目案の妥当性を考査した（面接時間 30 ～ 60 分）。面接内容は研究参加者の同意のもと録音した。リクルートは、HIV 陽性 MSM の場合はふれいす東京に対面相談で来所経験がある者から、献血習慣がある MSM の場合は機縁法で、協力を依頼した。調査項目については②の調査目的および先

行研究との比較検討のために、下記のように作成した。詳細は資料 1 に記載している。

・属性 ・自己のセクシュアリティの認識や行動 ・献血経験、動機、知識 ・HIV 検査受検経験 ・献血 / エイズ教育に触れた経験 など、全 26 問

②本調査：MSM を対象にしたクラブ来客者や一般 MSM 向けホームページ利用者を対象とし、今年度の①のパイロット調査をもとに作成した質問を用いて、ウェブ調査を次年度以降に行う。リクルート方法は、クラブ来客者の場合は QR コードまたは URL を案内、一般 MSM 向けホームページ利用者の場合はホームページにバナー広告を出稿し、200 人を目標に、ウェブ調査へリクルートする。

2. 献血と、特に MSM に関する諸外国のウェブ上での表記の比較

献血血液への HIV 混入防止のための諸外国における対策に関する先行研究（杉本和隆 [2005]: 日本エイズ学会誌）に準じ、対象地域をベルギー、英国、スウェーデン、カナダ、またその他、フランス、オーストラリア、アメリカの献血施策について、ウェブ上での表記の比較を実施する。各国の献血協力に関する、一般的な適格性について、どのような質問、条件を設定しているのかについて、インターネット上に公開されている情報を整理することを目的に実施した。なお、サーベイ対象の文献については、英語で提供されているものに限定した。

倫理面での配慮

調査内容は研究参加者の同意のもと、フィールドノートの作成および IC レコーダによる録音を行ったが、個人情報とデータについて、研究目的以外には使用しない。データは編集・集計して発表するため、個人情報は守秘され、厳重に管理される。

パイロット調査対象者のうち HIV 陽性者についてはふれいす東京の利用者であり、分担研究者（生島嗣）とは支援者被支援者の関係にあるため、研究参加への強制力が働く恐れがある。そのため、研究参加者に対し、本研究の参加は、参加者の自由な意思であり、不参加の場合でもいかなる不利

益が生じないことを、説明文書に明記するとともに、口頭での説明時に強調する。また、答えづらい質問には答えなくてよいことを伝える。

研究結果

1. MSM を対象とする献血に関連する経験に関する調査

インタビュー実施期間は 2016 年 1 月で、インタビュー協力者のリクルートは 2015 年 11 月～12 月に実施した。インタビュー協力者の概要は下記の通りである。

第 1 ケース

40 代、ゲイ、HIV 陰性。現在東京都居住で、東京都で育つ。大卒、自営業。献血は 18 才で初めて行った。これまでに 100 回以上献血をし、そのうち 80 回程度は 20 代の大学生のとき。現在でも献血に行くことがある。HIV 検査は定期的に受検していた。

第 2 ケース 40 代、バイセクシュアル男性、HIV 陽性。現在東京都居住で、神奈川県で育つ。大卒、休職中。献血は 25～26 才で初めて行った。2015 年に献血で HIV 陽性が判明。感染がわかるまで 30 回ほどの献血を行っていた。HIV 検査は、自発的に HIV 検査を受けたことがなかった。その理由として、男性とセックスの機会を持つようになったのが 40 代になってからであり、また、自分の性行動のリスクが低いと考えていたため。

第 3 ケース

40 代、ゲイ、HIV 陽性。現在東京都居住だが、北海道や九州地方など、学齢期は地方で過ごした。大卒の後、専門学校を卒業し、会社員となる。献血は 23 才で初めて行った。2001 年に献血で HIV 陽性が判明。感染がわかるまでに 7～8 回の献血経験。HIV 検査は過去に何度か検査を受けたことがある。また、不特定多数との性行為をしていた訳ではなく、自分の性行動のリスクが低いと考えていたため。

以下では主に、4 つのテーマに分けて、インタ

ビューデータを整理する。

結果①献血の動機

HIV 検査目的で献血を利用している / いた人は、今回のインタビュー協力者にはいなかった。HIV 検査については、別に不安があれば保健所などで検査を受けていた。第 1 ケースのインタビュー協力者の場合、現在は時間に縛られることをさけるため、郵送検査を活用していた。

「将来結婚しないから、他の形で貢献をしたいと思っていた」、「必要としている人がいる」というボランティア感覚など、全てのインタビュー協力者が「社会貢献」を理由としていた。一方で、非正規雇用だと健康診断を受ける機会がないため、「誰かに役立つことが 8 割、健康診断として献血で知ることのできる他の数値を利用したいという思いが 2 割」との回答もあった。また、社会貢献を裏付ける意識として、自らの HIV 感染リスクの低さが見受けられた。そのため、ウィンドウピリオドについては、意識していなかった。

結果②問診票の献血適格性に関する項目

問診票「6 ヶ月以内に次のいずれかに該当することがありましたか。」のうち、「男性どうしの性的接触があった。」について、すべての回答者が、それに丸をつけるとせっかく貢献しようと思った献血ができなくなるので、該当しないと「ウソ」をついていたと回答した。

すべての協力者が、文言について合理的で納得ができるような説明とは感じなかったと答え、創意工夫が必要ではないかと話していた。疫学レベルで、新規 HIV の新規感染のうち 8 割を男性同性愛者が占めていることは理解している。しかし、排除項目に入っていると、「差別されているような気がする」と答えていた。

結果③献血での HIV 陽性の告知とコールバックシステムの認知

献血後の検査結果は、「本人には告知されない」という情報が共有されていた。第 1 ケースのインタビュー協力者のような頻回献血経験者でも、「実際には告知されないことは知っている」と答えていた。

コールバックについては「献血が終わった後に、システムについて書いてある紙をもらった」、「看護

師から採血した後に、毎回言われていた」など、「コールバック」という言葉は知らなくても、事後に申告できるシステムがあることについては、献血時に情報提供され、認知されていることがわかった。

結果④ HIV 陽性告知時の対応

第 2 ケースのインタビュー協力者 (2015 年告知) 封書でまず「話したいことがあるので電話してください」といった内容のものが届き、電話で「HIV の再検査をしたい」といわれ、HIV の検査のできる拠点病院の予約した。拠点病院のまえで献血の担当者と待ち合わせをした。自分がショックを感じたり、混乱することはなかった。

第 3 ケースのインタビュー協力者 (2001 年告知) 「お伝えしたいことがあるので、血液センターに来てください」と連絡があり、血液センターに行き、そこで告知を受けた。告知を行った医師からはその場で、「検査目的で受けたわけではないよね?」と繰り返し聞かれた。

2. 献血と、特に MSM に関する諸外国のウェブ上で の表記の比較

今年度は、英語によるインターネット上に公開されている情報を以下の国で行なった。アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、フランスについて、各国の一般的な適格性に関する質問項目を整理し、また、特に感染症や性行動、薬物使用に関する項目についての項目の整理を行った (資料 2)。なお、ベルギー、スウェーデンの情報については、インターネット上でアクセスしうる英語での情報が限定的だったため、十分に把握ができなかった。

MSM を対象とする献血の適格性に関する項目は下記の通りだった。

アメリカ

全ての MSM を献血から排除する事項を 2014 年に廃止し、過去 12 か月以内に、男性とセックスをした男性に禁止の対象を限定した。また、排除対象者へは寄付という社会貢献のための代案を提案している。

イギリス

過去 12 か月以内に、男性とオーラル/アナルセックスをした男性はコンドームまたは他の予防法を使用したとしても、排除対象とされていた。

カナダ

カナダ赤十字は 1977 年以来、全ての MSM を排除する、ドナー資格基準を導入した。しかし、2013 年、カナダの保健省は MSM の延期期間を、無期限から、最後に男性と性的接触を持った時から 5 年間に短縮した。2016 年には、MSM の延期期間を 5 年から 1 年に短縮する提案が保健省に提出される予定。

オーストラリア

過去 12 ヶ月の間に下記行為があったか。

男性とオーラル/アナルセックスをしましたか？コンドームを使用した“セーフセックス”であっても該当します。（あなたが男性の場合）あなたが（コンドームを使って/コンドームなしで）男性とオーラル/アナルセックスをした可能性があると思う男性と（コンドームを使って/コンドームなしで）セックスをしましたか？

ただし、この情報提供がされる際に、「あなたが献血出来ない場合、それは医学研究に基づく安全上の理由のためです。我々 Blood Service は性的指向に基づいた差別は行いません。」といった説明がなされている。

フランス

HIV の感染拡大を止めるための手段として 30 年以上施行してきた MSM からの献血禁止の法律を、2016 年に廃止することを決めた。MSM に対する禁止条項をどのように限定するかは、現在議論が行われているところ。

考察

献血についての諸外国のウェブ上での表記の比較からは、現在の MSM に関する献血の適格性についての条項を明らかにすることができた。今回対象とした多くの国では、2010 年代の間に禁止条項の変更に関する議論が起り、ここ数年の間に実際に変更が起こっている。その背景には、性的指向に関する「差別」や「人権」に関する議論の高まりがあ

るようだ。

日本の MSM に関連した禁止条項「6 ヶ月以内の男性どうしの性的接触」と比較してみると、実際には諸外国で設定されている禁止事項のほうが、条件としては厳格なものが多かった。しかし、web 上にその科学的な根拠が示されており、性的指向に関する差別に基づくものではないと献血協力者に明示するなどの工夫を行うことにより、献血協力者の信頼を得る努力がみられた。

それに関連して、インタビューでは、問診票の献血排除項目について、MSM のなかには合理的、説得力があると受け取らない人がいる可能性があることが明らかになった。場合によっては、「差別的」と受け取られ、排除項目の説得力を弱めていることが示され、文言のさらなる改訂が望まれる。

今回の結果から、どの協力者も献血の動機は「社会貢献」が主なものだった。HIV 検査の代用として献血を利用している人は、今回のインタビュー協力者にはいなかった。むしろ、自己の感染の可能性が低いとの認識が、社会貢献という認識のものと献血行動の合理性を保っていると考えられる。

また、理由は理解できても、「献血を検査目的で受けるな」と声高に言われると、献血で HIV 感染がわかった協力者にとって、「自分がまるで犯罪者のように言われている気がして、同じ陽性者でも感染経路について話すことができない」と語っているインタビュー協力者もいた。

これらのことから、下記のことが明らかになった。日本における献血の適格性に関する情報提供のあり方について MSM からの意見も反映して提供することにより、その適格性の設定の合理性、科学性の理解を得られる可能性がある。ただし、献血の安全性のために、適格性についてあまり声高に啓発が行われると、理解が得にくくなるおそれがある。今回の調査からは、MSM の献血提供者には、HIV 検査目的ではなく社会貢献の目的で行っている者が、いる可能性があることが示された。そして、MSM に対して、定期検査の重要性の啓発や、献血教育だけではなく、感染経路、ウィンドーピリオドなどに関するエイズ教育が並行して実施される必要があると考えられた。

今回のインタビュー調査の限界は、人数は限ら

れ、また機縁法でリクルートした協力者に限定した結果であることだ。今後は、インタビューシートおよびインタビュー結果の検討を通じ、次年度以降の量的手法を用いた本調査に活かしていきたい。

結論

MSMを対象とする、献血経験に関するインタビュー調査により、上記内容について明らかになった。インタビュー協力者の中には、HIV検査の受検経験があり、行為や性行為の人数なども少ないなど、HIV感染の可能性がほぼ無いとの自己認識が、献血へのハードルを押し下げている。そのことにより、MSMである献血協力者が、献血の適格性についての文言が「差別的」であると感じ、感染の可能性が低い自分なりの「社会貢献」への制限を限定解除してもしかたがないという、自分なりの合理性を得ることに作用している可能性がある。

健康危険情報

該当なし

研究発表

【論文発表】

- 1 生島嗣. HIV陽性者支援の現場から～MSM(男性とセックスをする男性)への支援を中心に. ころの科学 186号.52-56, 2016.
- 2 生島嗣. 信じて自分の秘密を打ち明けることから変化は始まった. 季刊セクシュアリティ 70号. 56-61, 2015.
- 3 生島嗣. 12月1日のエイズデーにHIV/エイズへの理解を深めよう. ひょうご人権ジャーナル「きずな」11月号. 兵庫県人権協会. 7, 2015.
- 4 生島嗣. HIV・HIV感染症—正しく知って、偏見のない社会を. いろいろな性、いろいろな生き方. ポプラ社. 62-63, 2015.

【学会発表】

- 1 生島嗣、牧原信也、福原寿弥. NPOによる対面相談のニーズとその対応に関する考察. 日本エイ

ズ学会、2015年、東京.

- 2 野坂祐子、生島嗣. 薬物使用経験のあるHIV陽性MSMの心理社会的要因—生態モデルによる分析から—. 日本エイズ学会、東京、2015.
- 3 佐藤郁夫、加藤力也、生島嗣. HIV陽性者のためのピア・ミーティングの運営と当事者の運営参加に関する考察. 日本エイズ学会、東京、2015.

参考文献

- 1 若林チヒロ, 生島嗣他 : HIV陽性者の生活と社会参加に関する研究, 厚生労働省科学研究費補助金 エイズ対策研究事業 平成25年度総括・分担研究報告書 地域においてHIV陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究, 39-96, 2014
- 2 塩野徳史, 市川誠一他 : 日本の成人男性および成人女性における個別施策層の状況とHIV抗体検査行動, 性行動に関する研究, 厚生労働省科学研究費補助金 エイズ対策研究事業 平成26年度総括・分担研究報告書 MSMのHIV感染対策の企画, 実施, 評価の体制整備に関する研究, 303-320, 2014
- 3 杉本和隆, 高西優子他 : 海外における献血血液へのHIV混入の防止対策 : 教育・面接等を中心としたスクリーニング方法, 日本エイズ学会誌, 7(1), 23-30, 2005
- 4 嶋根卓也, 日高庸晴他 : インターネットによるMSMのHIV感染予防に関する行動疫学研究—REACH Online 2011—, 厚生労働省科学研究費補助金 エイズ対策研究事業 平成24年度総括・分担研究報告書 HIV感染予防対策の個別施策層を対象にしたインターネットによるモニタリング調査・認知行動理論による予防介入と多職種対人援助職による支援体制構築に関する研究, 127-249, 2012

知的財産権の出願・取得状況(予定を含む)

該当なし